

論文内容の要旨

論文題目 供儀と文学

— ジョルジュ・バタイユにおける供儀の概念とその実践 —

氏名 福島 勲

A. アーウィン「バタイユの著作の中で、供儀は遍在するモチーフであり、宗教、芸術、エロチシズム、政治の領域を両義的に橋渡しする」と書くし、J.-L. ナンシーは、バタイユの思想は供儀に多大なる興味を注いでいたというよりも「取り付かれていた」と書く。実際、ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）の活動において、供儀という概念の存在は大きく、その意味は深い。本論文は、こうしたバタイユにおける供儀の概念に着目し、バタイユの思想の中でこの概念が持つ意味を追跡して行くものである。ただし、本論文の特色は供儀の持つ意味内容の解説に還元されるものではない。すなわち、本論文は、バタイユ思想における供儀の重要性を確認するだけでなく、この概念とバタイユのエクリチュール／テキストとの関係に新たな照明を当てることを目指している。つまり、バタイユにおいて、供儀は思考されていただけでなく、エクリチュール／テキストにおいて実践されていると主張することができるのである。

しかも、こうした視点が重要と思われるのは、供儀の実践としてのエクリチュール／テキストという観点が、バタイユ固有の問題であることを越えて、文学という我々の実践を背後から支えている要請とは何であるかを再検討する、一つの視座を提供するものと思われるからである。つまり、バタイユの供儀という概念、その実践を軸として、文学という活動の意味を問うこと、これが本論が到達しようとする最終的な地点である。

第一部では、バタイユの供儀の概念の文化的背景を整理するために、旧約と新約の世界に現れる供儀、そして、フランス社会学で扱われた供儀の概念を考察している。ユダヤ教、キリスト教の歴史に現れる供儀は様々なヴァリエーションのもとに現れる。例えば『カトリック神学事典』は旧約の供儀を「燔祭」、「素祭」、「罪祭」、「和解の捧げ物」の四つに分類して見せるが、しかし同時に、その区別が恣意性を免れないことも認めている。ただし、そこで興味深いのは、新約の供儀である「聖体拝領」が、最後の晩餐という「和解の捧げもの」という旧約的な供儀を起源に持ち、現実には血が流されるのか、流されないのかという差異はあれ、結局のところ、犠牲を媒介とした一体化（コミュニオン）という論理によって支えられているという点である。つまり、旧約と新約の供儀に共通する特徴とは、何よりも、犠牲を媒介としたコミュニオン（一体化）であり、神と人間との関係、信者同士の間の関係を成立させるという機能に求めることができるのである。

他方、フランス社会学において、供儀は宗教的文脈から切り離され、社会との関係において考察されることになる（ただし、彼らの宗教や供儀に対する特権的な注視は、彼らの考察する社会のイメージが何よりも宗教的な感情によって支えられた社会であったことを示すものである）。モースやユベールは、供儀の起源を巡る論争において、「和解の捧げ物」に見られるコミュニオンという要素よりも神への奉獻といった要素の方が本質的な重要性を持つことを主張したが、興味深いのは、デュルケムはそこに加えた帰結である。すなわち、デュルケムは供儀の能動的性格を強調しており、神々（フランス社会学において、それは社会や共同体の象徴である）がいるから供儀が必要なだけでなく、供儀によって神々が維持される、もっと言えば、供儀から神々が創出されるという観点を提起するのである。おそらく、ここには、宗教を創始する、もしくは、共同体を創始するために供儀の必要性を主張したバタイユの論理の原型を見ることができるはずである。

いずれにしても、これらの参照から結論されるのは、ユダヤ教、キリスト教の文脈にせよ、フランス社会学の文脈にせよ、供儀が何より人間を結ぶための起点（コミュニオン、共同体、社会）として位置づけられているという点である。従って、バタイユが供儀を語る際、常に交流（コミュニケーション）が問題にされることの意味はこうした背景とともに理解される必要がある。

第二部では、こうした背景を踏まえつつ、バタイユにおいて供儀の概念が生成される過程を追跡している。例えば、活動の初期（1920-30年代前半）において、供儀はバタイユにとって一つの謎として現れる。それは合理的な説明の彼岸に位置しながらも、抵抗し得ない魅力によってバタイユを引きつける現象であり、この謎に対する答えの試みとして、

生と死の同一平面化（「失われたアメリカ」）、主体の自己破壊（「切除による供犠とヴァンセント・ヴァン・ゴッホの切られた耳」）、さらに「喪失」の原理（「消費の概念」）といった思索が展開されている。特筆すべきは、喪失の原理において、供犠は破壊（＝喪失）を手段とする異質な価値（「聖なるもの」）の生産であるという説明が見られる点であるが、しかしながら、この時点では、供犠は「概念」として統一的な像を結ぶには至っておらず、敢えて言えば、エネルギーの無方向的な発露という側面が強い。

それに対して、中期（アセファル、社会学研究会 1935-9 年頃）以降、バタイユの供犠はより明確な輪郭を持ったそれへと収斂していくことになる。それは「共同体」の起点としての供犠であり、バタイユは、当時的人类学や社会学の成果に触発される形で、供犠を宗教や社会といった共同体を生成する一つの可能性として考察している。具体的なその一例として、バタイユは、共同体において、成員相互の究極的な連帯が可能になるのは死の仲立ちによってであり、この死を召喚し、その認識を行う場こそが供犠であるという理論化を試みている。

しかし、バタイユの供犠が、最大の理論的深化を遂げることになるのは、『内的体験』や『有罪者』の執筆の時期である。第二次世界大戦に勃発とともに始められたこの思索の中で、供犠が人間と人間の間に関係を成立させるという基本的な構図に変更はないものの、そこで見出される人間同士の関係は、「共同体」という実体的なものではなく、「交流（コミュニケーション）」という運動として捉えられることになる。しかも、変化はそれだけではない。バタイユの供犠は、その対象を共同体から交流へと変化させながら、さらに、その実践の場所を現実空間から表象空間へと移動させるのである。その一つの形が、内的体験という内面で行われる供犠であり、『内的体験』というテキストはこの供犠の内容と方法を伝達するための試みであると言って良い。

ところで、内的体験とは、精神集中した意識の中で供犠の場面を再構成し、あたかも眼前で供犠が行われているかのようにして、その供犠に参加する体験であると言えるが、興味深いのは、この内的体験を伝える『内的体験』というテキストが、それ自体として、一つの供犠の舞台としての構造を備えているという点である。つまり、ここでバタイユの供犠は、交流へと結ばれただけでなく、内的体験とエクリチュール／テキストという新たな形式を獲得することになったのである。

そして、第三部においては、『内的体験』に依拠しつつ、エクリチュール／テキストによる供犠の可能性が検証して行く。その際、エクリチュールとテキストとの間に区別が設けられて、とりわけ供犠としてのテキストという観点とその最大の可能性として提示されることになる。もちろん、主体の供犠として行われる内的体験やエクリチュールの重要性

を無視することはできないが、内的体験やエクリチュールは対自的行為として自己完結してしまう危険性をはらんでいるのも事実である。もし供儀が他者たちとの交流を目指すものであるとすれば、やはり、その実践の場所は、読者たちの存在によって成立するテキストという場所こそが最適であると思われるからである。

では、テキストによって供儀が実践されているとはいかなる意味においてであるか。それは、単に、書く主体のエネルギーの消失が行われているといった比喩的な、抽象的な意味に留まるものではない。むしろ、そこには確固たる供儀の舞台装置を見出すことができるのであり、テキストは供儀がスペクタクルとして文字通り実践される場として位置づけることができる。例えば、供儀とテキストの間には次の様な構造上の類似を打ち立てることができる。すなわち「犠牲者、供儀執行人、参加者」の三項は、そのまま「登場人物、話者、読者」の三項に対応させることができるのである（ちなみに、『内的体験』の場合においては、一人称の〈私〉が犠牲者の役割を果たすため、「犠牲者、供儀執行人、参加者」の三項は「話者、話者、読者」の三項として分析されることになる）。

しかも、供儀と文学テキストの親近性は構造的類似に還元されるものではない。例えば、『文学と悪』において、両者の親近性は〈悪 Mal〉という観点から説明されている。すなわち、供儀が死を通して聖性の開示を行ったのと同様にして、文学は〈悪〉を通して至高性の開示を行うのであり、供儀が聖性を仲立ちによって、参加者たちの交流を用意したのと同様にして、文学は至高性の仲立ちによって、意味や有用性に回収されることのない他者たちとの関係、「強い」交流を樹立するのである。ここで両者の間に確認されるのは、構造上の類似だけではなく、一つの内容的な類似である。すなわち、それは聖性や至高性と名指される、いかなる意味や有用性によっても侵されることのない人間の最終的な属性を確保して行こうとする意志、そして、この属性の共有に基づいた人間相互の関係、交流への意志である。

バタイユの思想とそのテキスト実践に貫かれているのは、こうした供儀と交流への意志である。そして、バタイユはその思想的可能性の最後の受託者として文学を名指すのである。バタイユが文学に期待するのは、超越的な媒介物（者）が何もないにも関わらず、というよりも、そうした媒介はおそらく永遠に不可能であるかもしれないという実存の条件の認識を通じて、人間相互の間のコミュニケーションを成立させることである。もちろん、こうした文学的コミュニケーションに、政治、経済、法律、宗教が持ち得るような、積極的な拘束力やその制度的存在を期待することはできないだろう。おそらく、その点において、文学は一つの呼びかけ以上の存在様式を持たないのである。ただし、それは、永遠に続けられる呼びかけ、他者たちに届くことを期待して行われる供儀であり、もし「聖なる」

次元とは先験的に存在するものではなく、供儀を起点として初めて創造されると考えたデュルケムやモースの観点が正しいとしたならば、あらゆる意味や有用性の彼岸に、人間と人間が会うための場所、言葉の強い意味における人間的なコミュニケーションの空間を創出、確保して行くためには、文学テキストという供儀を継続して行くことこそが必要である。